

10) サフラン=雑腹蘭

サフランはアヤメ科の多年草である。地中海の東部を原産とし、ヨーロッパ中南部やイランなどでも栽培されている。日本ではクロッカス属の秋咲き種をサフランと呼ぶことが多い。10~11月頃細い葉の間に花茎を伸ばし、芳香のある淡紫色でロート状の花を開く。花弁は6枚で長い花筒を持ち、その中に濃赤褐色で3裂した長さ3cmほどの花柱がある。和名の起こりはオランダ名『Saffraan』(ザフラン)の音訳である。学名は『*Crocus satibus*』で、属名は雌蕊の柱頭が垂れさがることから、糸もしくは紐を意味し、種小辞は栽培されるという意味である。イギリスでも『saffron』、ドイツでもフランスでもサフランだが、アラビア語では『Sahafaran』(黄色いという意味)。また中国では『番紅花』(バンコウカ)と呼んでいる。

サフランは最も高価な香辛料であると同時に薬草でもある。花柱を乾燥させたものを古くからサフランといい、鎮痛、鎮静、通経剤などとして用いられたことが、ディオスコリデスの『薬物誌』にも記されている。とりわけ薬用成分は子宮に選択的に作用するために、月経困難、更年期障害、子宮出血、流産癖などの治療には欠かすことのできないものであった。また乾燥させた花柱は黄色色素『クロシン』や芳香成分を含み、水の中では非常に伸びがよく、快い香りと苦みがあるために食品、化粧品、薬品の染料などに用い、特に地中海料理のパエリアや、ブイヤベースには必須の素材であった。このため地中海地方では古くからサフランを廻って、経済活動が活発に行なわれ、紀元前15世紀にはミノア人が地中海でのサフラン栽培を独占していた。クレタ文明の経済的な基盤は、サフラン貿易の利益によるものと言っても過言ではない。『黄金のリンゴ』を廻って、美を競ったあげくに起こったトロヤ戦争も、サフランを廻る争いと思われ、ギリシャ時代からローマ時代になっても、金と同じ価格で取引引きされたといわれている(01-05-06-2 リンゴの項参照)。またサフランの雌蕊の収穫作業は過酷な重労働で、短期間に全ての雌蕊を採取するには、相応の労働力が必要であり、サフラン畑の経営にはそれなりの資本蓄積が必要だった。かつて1オンス(約30g)のサフランを収穫するには、花の数に換算すると4,300輪が必要だったという。ミノア人がトロヤ戦争後もサフランの権益を守り続けることができたのは、気候風土による恩恵が大きかった。地中海独特の強い光と、そして何よりも栽培に適した土壌があったからということもできよう。しかしギリシャ・ローマの衰退後はアラビア人がサフラン貿易に加わり、サフランはクロッカスと呼ばれるようになってゆく。

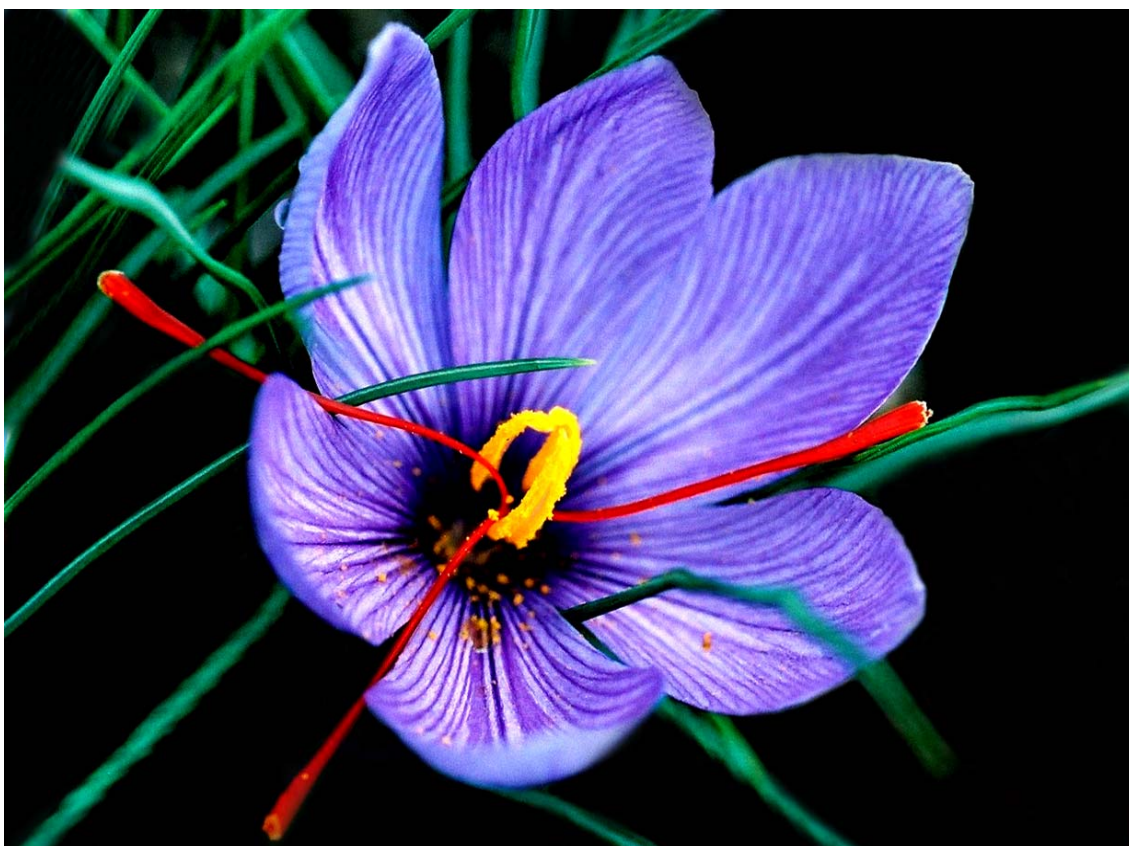
イギリスでは貴族階級の間で中国茶にサフランを入れるサフラン茶が流行したが、この時代は英国の全盛時代でもあった。サフランが日本に伝わったのは幕末の文久年間(1861~1864年)のことで、当時はもっぱら薬用として栽培された。また我が国の文献にサフランが現れるのは江戸中期の1763年のことで、平賀源内によって著わされた『物類品鑑』(ブツルイヒンシツ)に、「洎夫藍」と記されているのが最初であった。



サフランは紫色系の花を咲かせ濃淡2色があるようで、これは淡い紫である。どちらも花卉の裏はやや白みを帯び、東京付近では11月上中旬頃に花を咲かせる。



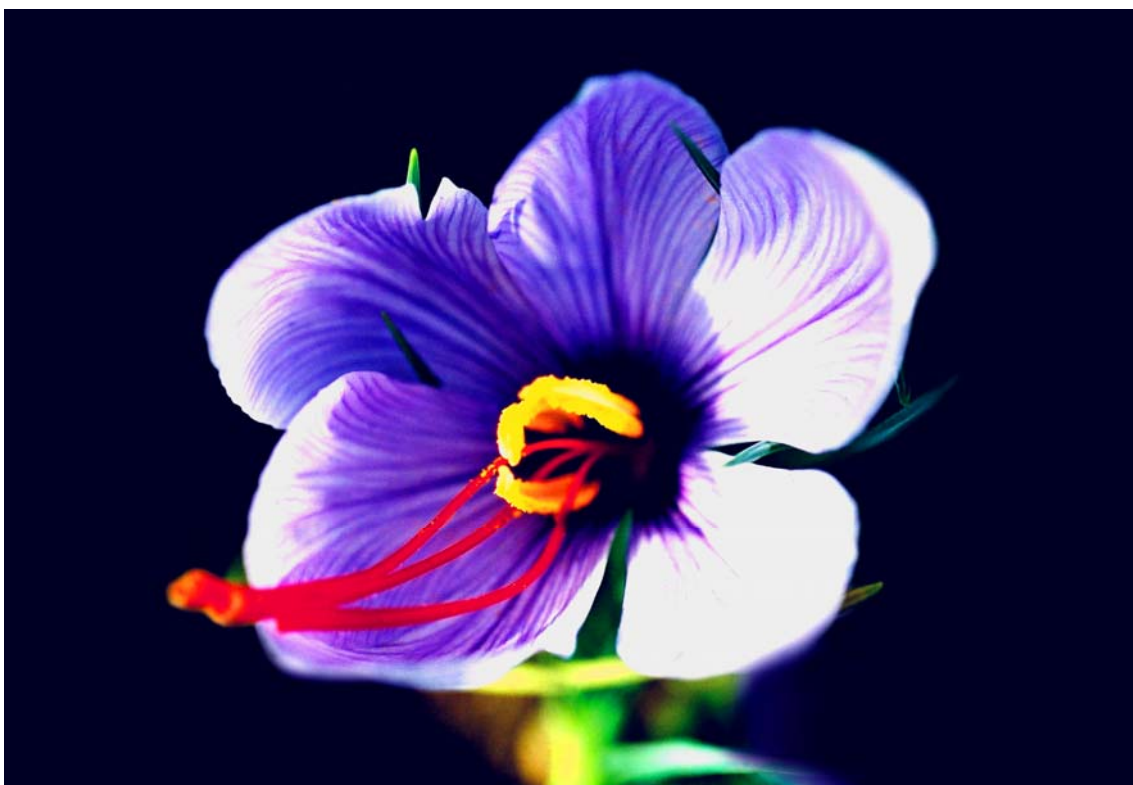
アングルを変えて真上から撮ると、花卉には濃い紫の縞模様になっている。



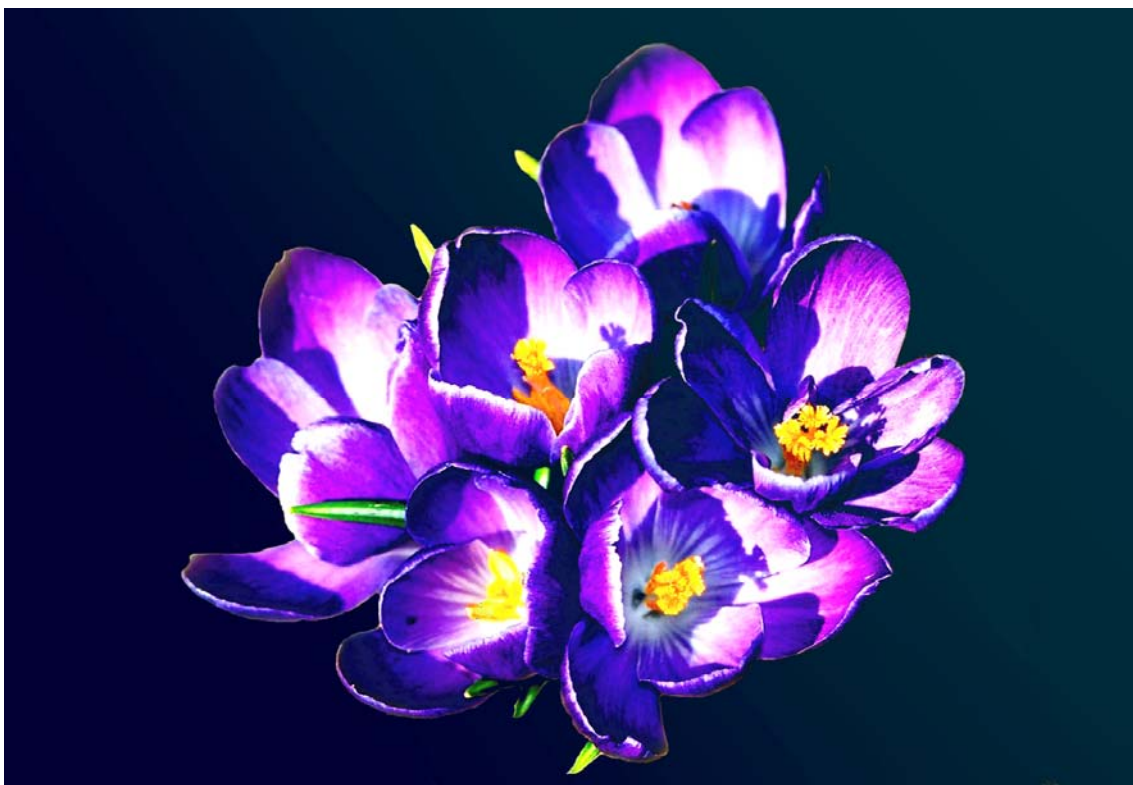
これは濃い紫のサフラン。この3本の雌蕊に世界中が振り回されたことを考えると、経済はもとより歴史ですら、人間の強欲から出発しているとしか思えないのだが…。



咲き出したサフラン、この赤い雌蕊を摘み取る(東京都小平市薬用植物園)。



黄金のリンゴとはこのサフランではなかったのか、というのが筆者の持論である。そう考えると、どこか魔性に満ちた花のように見えてくるから不思議だ。



春咲きのサフランがこのクロッカスだが、クロッカスには3本の長い雌蕊はない。

[目次に戻る](#)